

支持体が現れる前の本

NPO 法人書物研究会講師 平野照子

ナグ・ハマディ写本

ナグ・ハマディ写本（ナグ・ハマディしゃほん、The Nag Hammadi Codices）あるいはナグ・ハマディ文書（ナグ・ハマディもんじょ、ぶんしょ、The Nag Hammadi library）とは 1945 年に上エジプト・ケナ県のナグ・ハマディ（エジプト・アラビア語版）（より正確には、ナグウ・アル＝ハムマーディ^[1]）村の近くで見つかった初期キリスト教文書のことである。ナグ・ハマディ写本は、二十世紀最大の考古学的発見に数えられており^[2]、事実、初期キリスト教の研究を飛躍的に進展させた^[2]。ナグ・ハマディ写本は、古代キリスト教を知るための原資料としては死海写本につぐ重要性を持つと見なされている^[2]

ナグハマディ写本

1945 年、エジプトのナグハマディ村でつぼに入った状態で発見された冊子〔一折本〕で、13 冊あったといわれている。本文はパピルスでできており、2～4 世紀のものといわれている。



綴じ穴に革紐を通して、表紙の背で結んでいる。



コプト綴じ

背の外観はエチオピア綴じと似ているが、針は1本で綴じる。1折目の各綴じ穴から糸をリング状に出しておき、2折目で1折目のリングをくぐりながら綴じる。3折目からは下段の糸をすくいながら綴じる。リンクステッチの一つ。内側にわたる糸は1本になるので、厚みが出ない。



その他に、支持体のない綴じ方として、平綴じ、綴葉装綴じ、サドルステッチ、打ち抜き綴じなどがある。

支持体の出現

～ 1 2, 3 世紀	表紙 木の板、 本体 羊皮紙、紙 綴じ ヘリンボーン（革紐をねじった支持体を使用） 角背 綴じの補強として支持体が入るようになる。 表紙は本体と同寸の木の板を使用し、板に穴をあけて支持体の端を貼り付けて、本体を結合した。 表紙の板と背を革でくるみ、背の天地には革のタブが付くようになる。
-------------------	--

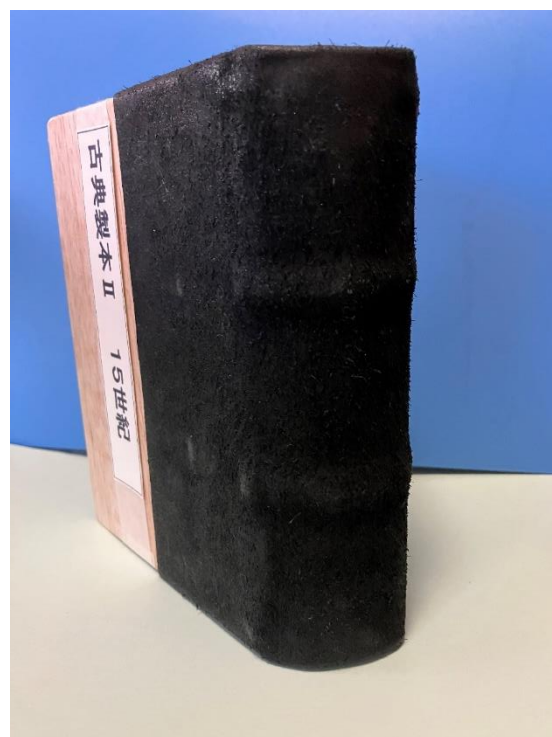


背の構造

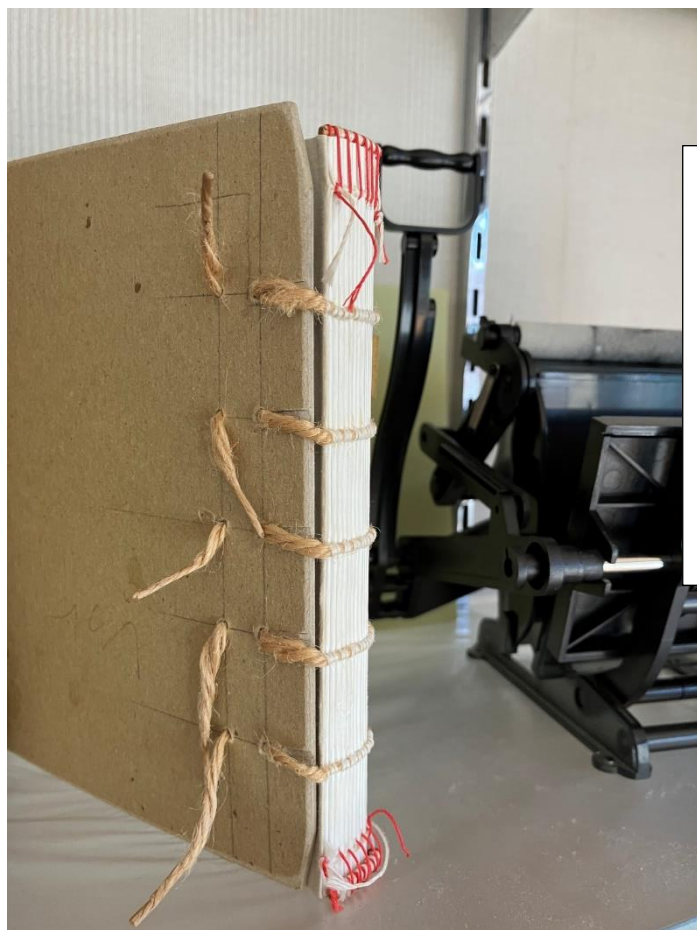
1 2, 3 世紀 ヘリンボーンの表紙



～ 15 世紀	グーテンブルグが活版印刷を発明（1450 年頃） 表紙 木の板、 本体 羊皮紙、紙 綴じ ダブル・コード（麻紐2本ずつを支持体を使用） 丸背 本体用紙に見返し(綴じ見返し)が付くようになり、表紙のサイズは本体よりやや大きくなり、「ちり」が出現する。 背の形は利点の多い丸背が主流になる。 花布は革紐や麻紐を芯にして編み、表紙板の穴に通した。 グーテンブルグの活版印刷発明により、それまでの手書きによる写本や木版から機械による印刷に変わり、多くの本が出回るようになる。
------------------------	--



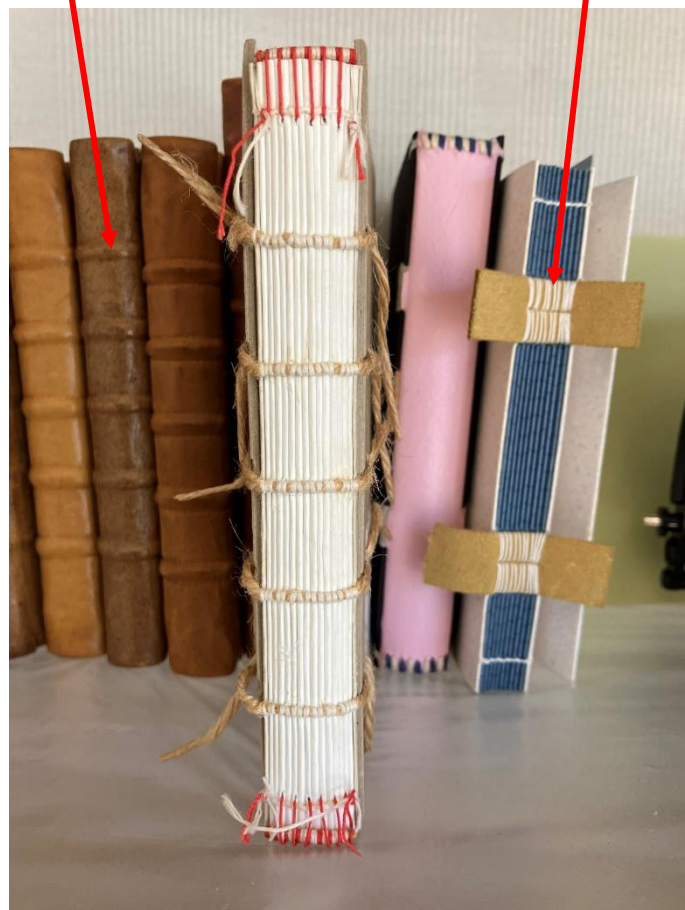
～ 18 世紀	表紙 紙（ボール紙）、 本体 紙 綴じ シングル・コード（麻紐1本ずつを支持体に使用） 丸背 製紙技術の進歩により、厚紙の製作が可能になり、表紙として使用されるようになる。 花布は表紙との結合は無くなり、装飾性が強くなる。 見返しにマーブル紙が使用されるようになる。それまでの綴じ見返しから貼り見返しに変化していく。
------------------------	--



写真中央のシングル・コード（麻紐1本ずつを支持体に使用）で綴じた本に革を貼り付けた本。
支持体の部分が盛り上がっている「レイズド・バンド」の形態

フィレンツェ・バインディング

1800年代のフィレンツェで帳簿の製本に用いられていた綴じ方。革コードの中央に切り込みを入れてダブルコードの巻き綴じで綴じていく。



本綴じ（本かがり）

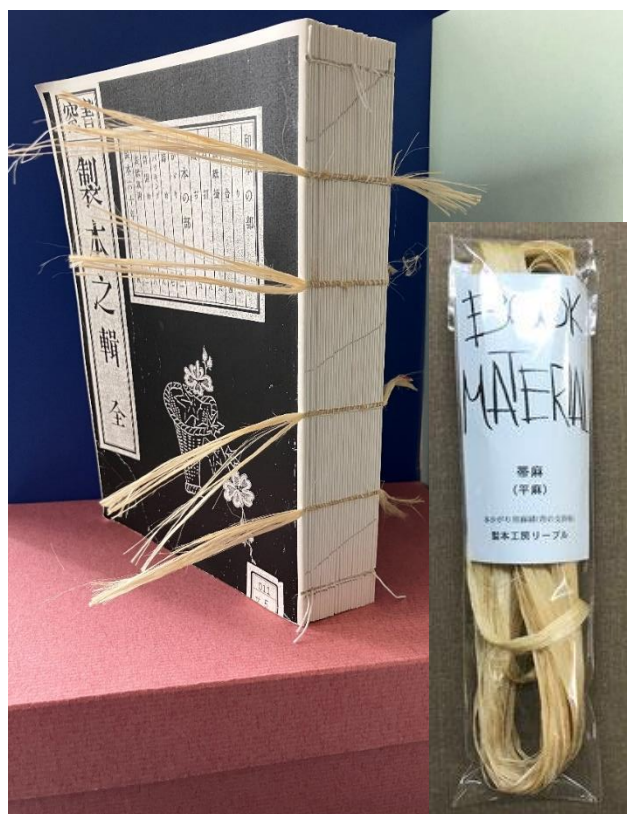
一番丁寧な綴じ方といえる。布テープや麻の緒を支持体を使い、折丁の全ての綴じ穴に糸を通して綴じていく。欧米での手作業による製本では一般的に使われている。

支持体は綿テープ



支持体は帯麻(おびあさ、平麻)

帯状の麻の繊維で、手かがりの背の支持体などに使用。



和紙の支持体

支持体は薄手の和紙を三つ折りにしたもの

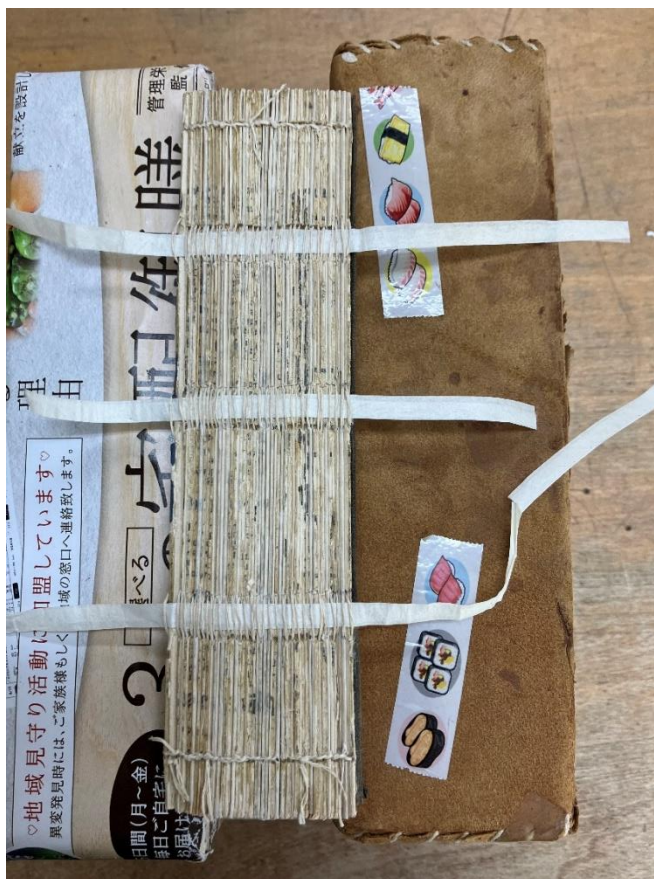


修復例

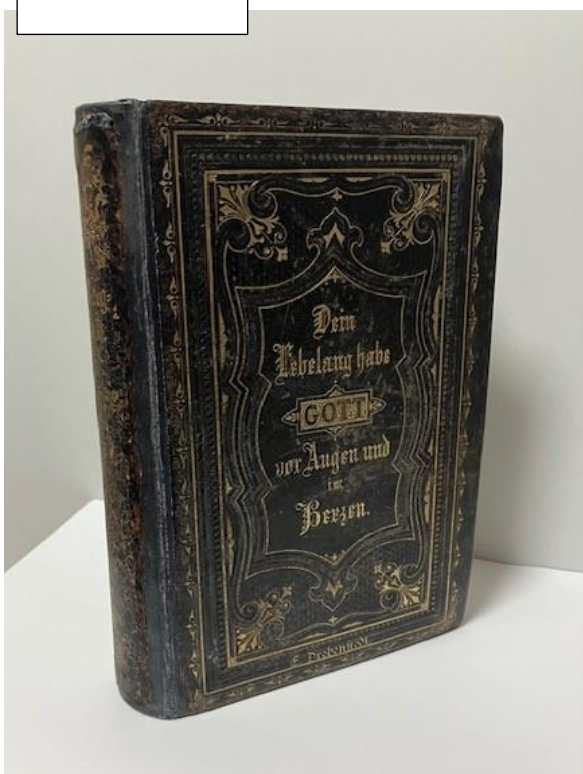
支持体は薄手の和紙を
三つ折りにしたもの

写真の本は、1888 年に
ドイツで出版された祈
りの本です。

表紙も含めてかなり傷
んでいるので、解体し
て補修をしています。



修復後



修復前の状態

